

世界史B（2年） 4/13～17の学習内容④

（1）カール大帝

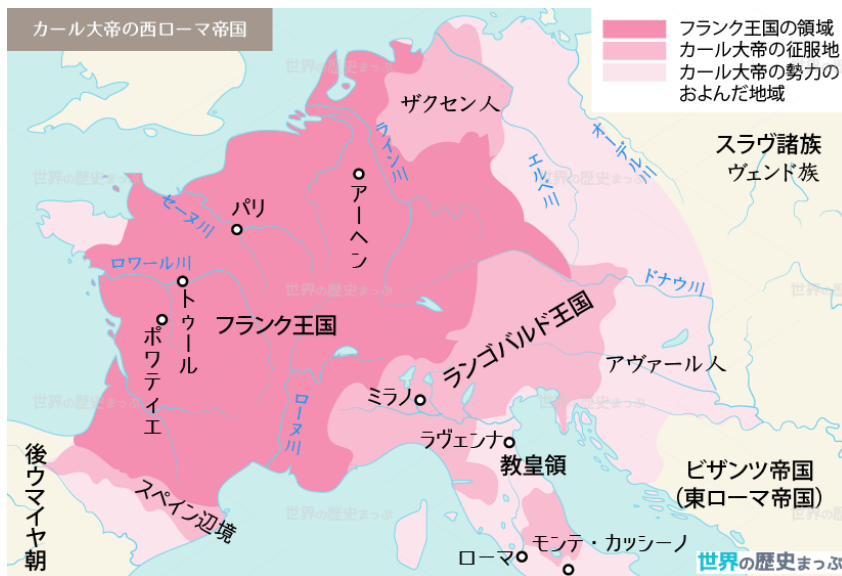
前回の解説の最後で、カロリング家のピピン3世が、フランク王国の王位を乗っ取ったところまでいきましたね。

カロリング家の長男は、「カール→ピピン→カール」と名前を受け継いでいくので、カール＝マルテル、ピピンの次は、もちろんカールです。右の絵の人物で、歴史上「カール大帝」と呼ばれる人物です。右の肖像画の人物です。

右の絵は、ルネサンスの時代のドイツの画家、デューラーという人が書いた想像図です。

カールは、現代のフランスとドイツの始祖と見なされている、西ヨーロッパにとってとても重要な人物です。だから「大帝」なんですね。

カール大帝は武勇に優れた君主で、勢力圏をそれまでの倍近くに拡大し、今のフランス、ドイツ、北イタリアがほぼ含まれる大帝国を築きました。



上の図を見てみてください。カールが戦った相手で、重要な勢力が4つあります。

① 北イタリアのランゴバルド王国、北ドイツのザクセン人など、ゲルマン人勢力。

ゲルマン人は西ヨーロッパに多くの国を作りましたが、この二つを滅ぼしたことで、西ヨーロッパをほぼ統一したといえます。

ちなみに、ザクセン人の一部は、アングル人と一緒にイギリスへ渡り、「アングロ＝サクソン人」として、現在のイギリスの原型を作りました。

② パンノニアのアヴァール人

「パンノニア」って、いまのハンガリーです。ここは草原が広がっていて、東方から騎馬游牧民が移動してきた時には、ここを本拠地にすることが多いんです。「フン族」もここが拠点

でしたね。

アヴァールも騎馬遊牧民で、モンゴル高原から来た「柔然」の末裔ではないかと言われていました。フン族の崩壊後に侵入して、西ヨーロッパを略奪していましたが、カールに撃破されました。

③ イベリア半島のイスラーム教徒

この時代のイベリア半島は、イスラーム教徒の勢力圏です。どの国が支配していたか、わかりますか？

答えは、「後ウマイヤ朝」です。この時代、西アジアではもうアッバース朝が成立しているんですね。

カール大帝は大変な動物マニアで、自分の動物園を作ったのですが、アッバース朝のハールーン＝アッラシードに象を贈ってもらいとっても喜んだ、という記録が残っています。

こうして広大な領土を手に入れたカールですが、領土の維持には、文書を用いた統治制度が不可欠。破壊と征服は暴力で達成できても、持続には知性が必要なんですね。

広大な領土を統治する基本は、「役人を派遣して、そこに見張りも送る」ことです。全世界で共通です。

カールは、広大な領土の諸地域に「伯」という役人を置いて、自分の代わりに統治させました。いわゆる、「伯爵」という貴族の起源です。もちろん、巡察使という役人を派遣して見張ることも忘れません。

さらに、カール自身はほとんど字が書けなかった（当時のゲルマン人のほとんどはそう）のですが、宮廷には当時一流の学者（代表はアルクィン）を招き、文化水準を向上させようとしていました。

彼らの力を結集して、図書館を作ったり、アタナシウス派のキリスト教理論を学ばせたり、ローマの建築技術を用いた大聖堂を、首都のアーヘンに建設させたりしたんです。アルファベットの小文字も、彼らが作りました。

このような、ギリシア＝ローマ時代の文化水準を「再生」させようという動きを、「カロリングニルネサンス」と言います。ルネサンスって、「（文化の）再生」っていう意味なんですね。

カール自身も、夜な夜な石板に文字の練習をしていたらしいですよ。身長 195cm の大男が字の練習をしている姿って、なんだか不思議ですね。でも、権力を握っても、年齢を重ねても、成長を続けようとする人って、魅力的だと思います。逆に、「完成」してしまい、自分の完成形と思う生き方を他人に押し付ける人って、あまり魅力的じゃないと思いますね。

さて、ここからがカール大帝の内容のピークです。

西ヨーロッパをほぼ統一し、イスラーム教徒やアヴァール、ザクセン人といった非キリスト教徒を追い払ったカールに、ローマの教皇は、熱い関心を寄せていました。

この時のローマの教皇は、レオ3世という人物。「レオ」って、ラテン語でライオンのことです。教皇は、カール大帝の父であるピピンの即位を支持して、「教皇領」という領土をもらいましたが、軍事的な力はありません。東ローマ帝国の皇帝とは、聖像崇拝の可否をめぐって喧嘩中。とても心細い立場なわけですよ。

レオ3世はある時、ローマ市の市民に反乱を起こされてしまうのですが、その時、カール大帝はザクセン人との戦いで鍛えられた精鋭を率いて救援に訪れ、レオ3世を救出します。

そんなカール大帝を、なんとしてもキリスト教会の保護者としたい。

そう考えたレオ3世は、カール大帝に「西ローマ皇帝の帝冠」を贈呈し、「西ローマ帝国の復活」を宣言しました。西暦800年のクリスマスの日のことでした。

解説の最初に乗せたカールの絵を、もう一度見てみてください。

右手に剣、左手に十字架を持っていますね。ルネサンス時代の絵には、必ず象徴的な意味が込められていて、意味のないものは基本的に描かれません。（「イコノロジー」と言います）この絵は、**剣によって帝国を築いたカールが、ローマ教会の守護者となったことを、描いているのです。**

一方、教皇にとっては、「ビザンツ皇帝の保護下から離れ、独立した教会として存在できる」という大転機でした。

この後、ローマ教皇を中心とする西方のキリスト教会と、ビザンツ皇帝を中心とする東方のキリスト教会は、時間をかけて別の団体になっていきます。

教皇を中心とする西ヨーロッパのキリスト教会が、「ローマ＝カトリック教会」。

ビザンツ皇帝を中心とする東ヨーロッパのキリスト教会が、「ギリシア正教会」。

カールが戴冠を受けたことで、西ヨーロッパと東ヨーロッパ、そしてイスラーム世界は、それぞれ別の文化圏として、発展していくことになるんですね。その意味でも、カール大帝の時代におこった出来事は、歴史的に見て、ものすごく重要なことです。

右はカール大帝のサイン。
（ラテン語で「KAROLUS」の頭文字）
でも実は、彼が自分で書いたのは、
真ん中の菱形だけ



※そんなナイスガイ、カール大帝の4コマ漫画が下のサイトで見られるので、興味がある人はのぞいてみてください。<http://rank119.gozaru.jp/img/kal.html>（アルクインやハルアラも出てきます）